

清潔志向という名の暴力

—Mark Twainの*The Adventures of Tom Sawyer*における浮浪者対策—

本 岡 亜 沙 子

【キーワード】アメリカ文学、マーク・トウェイン、『トム・ソーヤーの冒険』、
清潔志向、浮浪罪

はじめに

Mark Twain (本名 Samuel Langhorne Clemens, 1835-1910) の*The Adventures of Tom Sawyer* (1876) とその続編*Adventures of Huckleberry Finn* (1885) には、浮浪者が多く登場する。Huckleberry Finn (以下、「ハック」と表記) とその父親、逃亡奴隷Jim、インディアンと白人の混血Injun Joe、詐欺師仲間のKingとDukeがその代表例である。共同体の治安を乱す厄介者の彼らは、村内の母親たちから忌避されたり、浮浪罪で捕まえられたりしている。

彼らには、母親(的存在)の不在という共通点もある。ハックたち親子の母親はすでに他界し、ジムは奴隷制度によって妻と離別を強いられ、残り三名は、母親や妻の存在が言及されることさえない。Leslie A. Fiedlerは名著*Love and Death in the American Novel*の中で、浮浪者集団と「母親の世界」に関する興味深い指摘をしている。彼女の予想によれば、たとえば浮浪児ハックは将来的に、Tom Sawyerが受け入れる「母親の世界」を拒否する。その結果、彼は、“Having rejected the world of the mothers, Huck is condemned really to ‘go to Hell,’ to be lost in a sub-world of violence, a violence so universal that it is not judged but breathed like an atmosphere.” (286) と、暴力あふれる世界へたどりつく。つまりフィードラーは、「母親の世界」を浮浪者の群がる暴力的な世界と対峙している。この引用でさらに重要な点は、暴力の充満する下位世界において、暴力は批判の対象にならないとの箇所である。これは、暴力的な世界の外、たとえば「母親の世界」において、浮浪者引いては彼らの起こす暴力沙汰が批判の対象となることを意味する。事実、小説の舞台であるセント・ピーターズバーグの母親たちは、井戸端会議を開き、村の悪者を噂し猛批判している。浮浪児ハックは、彼女たちから“the forbidden society” (47) に属する少年とレッテルを貼られ、忌避された代表例である。母親たちの批判意識は噂話のレヴェルに留まらず、村内に彼との接触禁止令を布く行為にまで及んでいる。だが、所詮それは法的絶対力を持たない心理的な不文律である。ゆえにハックは、「母親の世界」の住民や、彼女たちの作った掟をすり抜けたたり拒絶したりできる。

一方、浮浪者の暴力の世界を取り仕切るのは、批評家Neil Campbellが“The St. Petersburg community

in *Tom Sawyer* is governed by just such a set of rules and regulations, with the ‘guard’ of the Judge at its center.” (128) と言及しているように、判事である。こちらの世界は、判事の法的権力によって外堀を固められているため、浮浪者側から拒絶することは不可能である。

以上、セント・ピーターズバーグには、浮浪者を取り巻く「母親の世界」と絶えざる暴力沙汰ゆえに法的処罰を行使する法的世界が存在することが明らかとなった。そこで、本稿では、同村内における浮浪者対策をとおして、両世界と浮浪者集団との社会的緊張関係を明らかにする。さらに、浮浪者対策に乗り出す人々に対するハックの態度をも示したい。

1 浮浪者を取り巻く父権的排除と母権的包摂

アメリカ社会は浮浪者のことをどう見ていたのか。本節では、浮浪者の代表格であり、フィードラーのいう暴力的世界に常駐するインジャン・ジョーやハックの父親を捕まえた浮浪罪を手掛かりに、彼らに対するアメリカ社会の対応並びに浮浪者と暴力的世界との関係を明白にしたい。

『トム・ソーヤーの冒険』の時代背景である1840年代に、浮浪罪はイギリスからアメリカに伝わる。浮浪罪の役割を一言で述べるならば、浮浪者が共同体にもたらす悪影響を回避すべく、彼らを社会の敵と明文化し、厳罰を持って処する法と言える。アメリカ版浮浪罪の興味深い点は、イギリス版よりも犯罪者や巡回行商人、求職中の職人、富裕階級の商人の息子、売春婦など、安寧秩序を乱す可能性の高い者を取り締まった点である (Adler 738-40; Chambliss 75-76)。¹ まさに、“vagrancy is a crime of *being* rather than of *acting*” (Lacey 1215) とあるように、浮浪者は、実際に犯罪を行わずとも犯罪者の臭いをかもしただけで捕まえられ、刑罰的で差別的な処遇を科された。共同体の他者排撃というセキュリティ機能が付与されたアメリカ版浮浪罪とは、この意味で、父権的な法的絶対力のもとに布かれた共同体の治安維持政策と同義である。

19世紀中葉アメリカの浮浪者対策でもう一点特筆すべきは、その時代、ヨーロッパからの大量移民が到来したことで社会変動が一気に激しさを増した点である。それゆえ、上記のように浮浪罪を適用できない事例も激増した。というのも、それ以前の共同体は、人の移動や出入りが少なく、住民同士は互いに顔見知りで、人付き合いも密接であったため、最低限の法さえあればあとは世間知で治安を維持できた。しかし、社会が流動化すると、必然的に共同体は外部の脅威に曝される。従来の法で対応できない浮浪者問題が跡を絶たなくなると、法律以外の手段でその問題解決に当たらざるを得ない。その好例が1840年代ボストン市に登場した公衆浴場政策である。浮浪者の急増や彼らの溜まり場であるスラム街の惨状に頭を痛める同市の政治家や社会改革者たちは、公衆浴場を新設し、そこへ彼らを招待した。ボストン市の有力者たちが浮浪者に入浴を促した理由は二つある。一つは、当時、水治療が爆発的人気を博していた点、もう一つは、同治療法が、被治療者の外見のみでなく、道徳心などの内面の改善に効果的と捉えられていた点にある。² たとえば、ドイツの近代水治療法の創始者 Vincenz Priessnitz (1799-1851) の教えをアメリカ

に導入した立役者の一人に、*Little Women* (1868-69) を執筆した Louisa May Alcott (1832-88) の叔父 William Andrus Alcott (1798-1856) がいる。彼は、定期雑誌 *Moral Reformer and Teacher on the Human Constitution* の中で、“the connection between cleanliness of body and purity of moral character” (14) を読者に教示する。³ 身体的清潔さ（外見）こそ道徳的な潔白さ（内面）の表れと信じる彼は、身体上の汚れや泥、垢などを洗い流し、清廉潔白な人物になるよう読者に説いた。⁴

ここで補足線を引いておくと、19世紀アメリカ児童福祉活動を研究した歴史家 Eric C. Schneider によれば、当時の社会は、貧困の原因を怠惰などの道徳的性格に求め、貧困者を処罰と規律強化によって道徳的に改善する対象と見なしていた (23)。これらの貧困観を加味すると、ボストン市の有力者たちが水治療を用いて社会に浮遊するばい菌駆除対策に乗り出した理由が明らかとなる。彼らは、視界に入る浮浪者たちというよりもむしろ、彼らが引き寄せる病気、さらにはスラム街の道徳的腐敗など、不可視の領域に脅威を覚え、それらの改善や撲滅を目指し、公衆浴場に彼らの全身を浸け、洗浄もしくは消毒したのである。⁵ この意味において、公衆浴場を用いた浮浪者対策は、浮浪罪の父権的浮浪者対策と異なり、母が子を包摂するかのごとく、社会から浮いた浮浪者を社会に取り込む、すなわち一所に集結させることから問題打開に取り組んだ政策と言える。

以上のように、『トム・ソーヤーの冒険』の時代の浮浪者対策は、彼らを社会から隔離もしくは排撃するか、社会に包摂し駆除対策に乗り出すか、二通りに分かれていたことを確認した。

2 セント・ピーターズバーグ内の浮浪者対策

それでは、セント・ピーターズバーグの住民はどのような浮浪者対策を取っていたのか。そして、その対策は、前節で考察したように、判事が発布する法的対策（浮浪罪）と、浮浪者を包摂した後で駆除に乗り出す母性的な対策に二分されていたのか。本節では、同村内の浮浪者対策を概観し、彼らと村民との間に存在する緊迫した社会的緊張関係に迫ってみたい。

まず、浮浪罪の名のもとに、治安判事が村内の治安を乱した浮浪者を村はずれの牢屋へ隔離する場面は、トムとハックの二大物語に頻出する。たとえばハックの父親は、深夜に村中を騒ぎ立てた罪で一週間投獄される。また、“murderin’ half-breed” (Twain, *Tom Sawyer* 74) や “bloody-minded outcast” (238) と殺人鬼になぞられるインジャン・ジョーも、いく度となく治安判事から投獄されている。浮浪罪の処罰方法を確認するべく、インジャンの体験談に耳を傾けてみよう。

“... her [widow Douglas’s] husband was rough on me —many time she was rough on me— and mainly he was the justice of the peace that jugged me for a vagrant. And that ain’t all. It ain’t the millionth part of it! He had me *horsewhipped!* —horsewhipped in front of the jail, like a nigger!— with all the town looking on! HORSEWHIPPED!” (208)⁶

治安判事は、インジャンを投獄した上、公衆の面前で鞭打ちする。前節で考察した身体に刻印す

る「S」や「V」のスティグマと同様、判事は、「黒んぼ」のごとく鞭打たれるインジャンの姿を村内の見世物にする。⁷ 共同体の治安維持を目的に、浮浪者の懲罰権利を認められた治安判事は、厳格な法の執行者という意味において、共同体の父親的存在として君臨している。

だがより注目すべきは、治安判事が浮浪児ハックに浮浪罪や鞭打ちなどの制裁手段を取っていない点である。キャンベルの論考に反して、ハックの取締役は、暴力的世界の代表取締役である治安判事ではなく、彼を養子縁組するダグラス未亡人を始めとした「母親の世界」の住民に設定されていたのだ。この特例のさらに不可思議な点は、これから述べるように、ハックが従来「母親の世界」から総すかんを食っていた点にある。母親たちの嫌悪感は、彼が初登場する『トム・ソーヤーの冒険』第六章、通学途中のトムが猫の死骸など怪しげなものを手にした彼を発見し声をかける場面に明かされている。ハックの紹介文は、以下の文章から始まる。

Shortly Tom came upon the juvenile pariah of the village^①, Huckleberry Finn, son of the town drunkard. Huckleberry was cordially hated and dreaded by all the mothers of the town^②, because he was idle, and lawless, and vulgar and bad^③--and because all their children admired him so^④, and delighted in his forbidden society^⑤, and wished they dared to be like him. Tom was like the rest of the respectable boys, in that he envied Huckleberry his gaudy outcast condition, and was under strict orders not to play with him^⑥. (47-48、下線部は筆者による)

村の母親たちは、「怠惰、無法、粗野、不道徳」(下線部③)なハックを「村ののけ者」(下線部①)扱いにする。彼女たちの露骨な態度は、たとえば、溺死したと思われていたトムとその学友 Joe Harper、ハックの三名が自分たちの葬儀に参列する場面に表れる。まず、登場場面を見てみると、“Tom in the lead, Joe next, and Huck, a ruin of drooping rags, sneaking sheepishly in the rear!”(131)とあるように、トムとジョー／ハックは差異化されている。帰還した英雄のごとく颯爽と登場するトムやジョーとは対照的に、ハックは、ボロボロの格好で、おずおずと教会に入る。ハックの存在は、さながらトムたちの持ち帰るゴミのようである。ゴミが村に戻ってきた時、村民は冷たい“so many unwelcoming eyes” (131) を露骨にハックに注ぐ。この視線の冷たさからも明らかのように、村民は彼の存在を疎み、完全に排除している。

ハックの自由奔放な生活を村の子どもたちは羨んでいる(下線部④)ものの、彼の世界に入り込むことは拒絶する。それどころか、子どもたちは彼をいじめている。そのいじめ方は質の悪いものようで、現に、ジャクソン島でトムたちと海賊ごっこを堪能した後、ハックは、“... here they [the boys] can't come and pick at a feller and bullyrag him so.” (103) との理由から村へ戻ることを渋る。さらに言えば、ハックと頻繁に連れ合うトムでさえ、実は彼に排他的意識を向け、一定の距離を保つ注意を怠らない。たとえばトムは、インジャンの隠し金のありかを探し止める際、“He [Tom] did not care to have Huck's company in public places.” (195) と、ハックと一緒に村内を歩く姿を見られることをためらい、彼を置いて単身で宿屋へ向かう。

なぜ、子どもたちまでハックから一定の距離を置くのか。それは、意図的か否かにかかわらず、彼らが母親たちの布くハックとの接触禁止令（下線部⑥）を遵守しているからである。この不文律は、「禁じられた社会」（下線部⑤）に住む（ように見える）ハックから村の「リスペクタブル」な子どもたちを守るため、母親たちが発布したものである。しかし同時に、彼女たちは、彼が村の子どもたちに危害を加える存在でないことも直感的に嗅ぎ分けている。だからこそ母親たちは、ハックを村八分にしたり浮浪罪で逮捕するよう治安判事に直訴したりと積極的な行動を起こす必要もなく、ただ村の子どもたちがハックに接触しないよう用心する。つまり、母親たちの処罰方法は消極的（“not to～”）なのである。

ただし、消極的な処罰方法が村内における勢力の弱さを示すわけではない。母親たちが村内に布く暗黙の了解事項は、女や子どものみではなく、村民全体に浸透し、猛勢をふるっている。それは、トムが授業に遅刻した理由“**I STOPPED TO TALK WITH HUCKLEBERRY FINN!**”（53）を耳にした教師やほかの生徒たちの反応からも明らかである。⁸ 教師は脈拍が止まりかけ、生徒たちは雑談を止め、トムが気を違えたのかと案じ始める。我に返った教師は、鞭打ちだけでは事足らず（それでも鞭が折れるまで連打しているのであるが）、悪童トムをさらに懲らしめるため、女子学生用の席に座るよう命令する。この展開は、トムの予想通りのものである。彼は、わざと教師の逆鱗に触れる発言をすることで、お気に入りの少女の隣に座り、話す機会を得たかったわけである。本エピソードは、ハックとの接触が教室の前で行う鞭打ち以上に強力な恥辱感を与えるべき愚行と村民全体に捉えられていたことをありありと物語るものであり、その意味で不文律が村内全体に浸透していた事実を裏付ける証拠となる。さらに言えば、母親たちの不文律に男性教師が盲目的に従っている点からして、村内における女性の勢力は鞭打ちに代表される男性のものよりも明らかに優勢なのである。

母親の不文律を破ったのが、村の有力者ダグラス未亡人である点は見逃せない。彼女は女中を複数雇い、山の手の屋敷に住む村随一の有産階級である。新聞の主筆を含めた村内の主資格が彼女の家に勢揃いする日までであった事実は、未亡人の言動に対する村民の注目度の高さを示す物差しとなる。まさにその日、彼女は“**poor motherless thing**”（169）の浮浪児ハックを養子にすると公言した。ハックとの接触禁止令を覆す発言に村民が異議を唱えなかった理由は本稿の範疇を超える問題であるが、あえて述べるならば、村民が村の有力者を反論しにくい点、さらに天涯孤独の未亡人が後継者養成の意味合いも兼ねて子ども特に男の子を引き取る意思を示したことを、同情も込めて尊重したことなどが挙がるだろう。

いずれにしても、以上のように、ハック以外の浮浪者は、判事の君臨する法的世界で、鞭打ち刑や投獄など父権的で「積極的な刑罰」を下される。一方、村の母親たちが流布する「消極的な不文律」によって、村民（特に子どもたち）と一定の距離が保たれていたハックは、母親たちを仕切るダグラス未亡人の一手によって、母の腕の中に入れてもらえることになる。

3 母の暴力を代表する清潔文化

次に考察すべきは、ダグラス邸に移ったハックに待ち構えていた浮浪児対策の詳細である。前節で考察したように、治安判事ではなく「母親の世界」の代表者が浮浪児ハックの取締役を務めるのであれば、後者の浮浪児対策は前者のものとうどう違うのか。本節では、この問題意識に立ち、未亡人の教育内容を分析するとともに、「母親の世界」に対するハックの反応を探っていく。

ダグラス未亡人がハックの矯正を始めるに当たり、最も重視したのは、教育、なかでも宗教教育や知識の注入ではなく清潔指導である。その事実は、彼女がハックへ与えた第一番目の指示“Now wash and dress yourselves.” (249) から明白だ。ここで未亡人の文明化教育を紹介すると、彼女は、浮浪児時代の残像を消滅すべく、毎日洗顔（入浴）し、清潔な服装を着て、就寝時は“unsympathetic sheets that had not one little spot or stain which he could press to his heart and know for a friend” (255) と、シミや汚れ一つないシーツで寝るよう、彼に義務付ける。⁹ハックは、「家」内で母親的存在が強要する清潔指導に抵抗感を拭えない。彼は、“I got to wear them blamed clothes that just smothers me, Tom; they don’t seem to any air git through ’em, somehow; and they’re so rotten nice that I can’t set down, nor lay down, nor roll around anywhers;It’s awful to be tied up so.” (256-57) と、風通しの悪い服装によって窒息しそうな感覚に陥る。体に密着する服は、意のままに動く自由を彼に認めてはくれない。さらに、彼の愚痴“I can’t ketch a fly in there [the church]” (257) からは、自由に腕を振り上げられない服の構造が、教会内で行動を自粛するようにとの未亡人流教育理念に従わざるをえない状況を否応なしに強要していることを容易に想像させる。

振り返れば、ハックが以前着用していた“old ruin of rags” (256) は、大人用の古着を寄せ集めたものであった。大人用の服装と子どもの身体というギャップから、当時のボロ着は体に密着しない上、風通しが良い。ボロ着生活の長い彼は、“She [the widow Douglas] put me in them new clothes again, and I couldn’t do nothing but sweat and sweat, and feel all cramped up.” (*Huckleberry Finn* 2) と不満を口にしているとおり、三週間以上経過しても密着する服装に順応できない。

ダグラス未亡人はなぜシミ抜きに固執するのか。批評家Bridget T. Heneghanによれば、18世紀後半から19世紀前半のアメリカ北部社会に、家の塗装、食器、墓石などを白色にする流行が起こった。白物は、北部の中・上流階級の白人に、泥汚れや奴隷制など黒さを連想させるものを意識的に排除し、自らの階級・人種的優位性を誇示するのに奏を功した (xiii)。1830年代に入ると、ようやくセント・ピーターズバーグのあるとされるアメリカ南部社会にも清潔の象徴色とされる白色の一大ブームが訪れる。1840年代を舞台にしたトムやハックの物語内で、ポリーおばさんがトムにしつこい塗り仕事を任せたり、自称公爵のヤブ商売人が歯石除去商品を商ったりしていたことは、人々の白物志向を裏付けている。

目に見えるシミ（汚れ）落とし以上に当時の人々の頭を悩ませたのが、目に見えない汚れの洗

浄である。道徳的潔白（内面）が外見に影響すると信じて疑わなかった彼らは、それゆえ、見えざる敵を無我夢中で退治しようとする。不可視の難敵退治に対する強迫観念を端的に表すのが、ポリーおばさんの水治療場面である。恋煩いが原因で寝込むトム側の事情を知らない彼女は、彼の体内に宿る見えざる敵“stain”（Twain, *Tom Sawyer* 256）が彼を死に至らしめると勘違いし恐怖におののく。そこでおばさんはトムを屋外へ連れ出し、水治療を始める。¹⁰ 彼女は、眠気も吹き飛ばすほど激しく、彼の体をやすりのようなタオルでこすり上げる。今度は、冷め切った体を温めるため、彼を家のベッドに寝かしつけた彼女は、濡れシーツと毛布で包み込む。この最終工程は、“till she [Aunt Polly] sweated his [Tom’s] soul clean”（93）と、彼の魂の悪い部分が汗とともに排出し、魂が完全に浄化されるまで続く。つまり、外圧を加えることで、体内の見えざる敵が観念し、毛穴から出てくることを彼女は期待している。勤の良いトムは、一刻も早く治療を終わらせるため、“the yellow stains of it [Tom’s soul] came through his pores”（93）と、何かしらのモノが毛穴から出てきた感覚を得たと、おばさん好みのことを口走る。このような彼の発言内容からも明らかなどおり、水治療は、不可視の領域をどんどん可視のものとしてでっち上げていく“quack”（93）な治療法なのである。

濡れシーツ地獄に体を拘束されたトムと同様、ハックも、終日終夜、清潔なシーツや衣服に挟撃されている。このハックの状況は、亜流水治療とでも呼ぶべきものである。なぜなら、体内の毒素を体外に出すべく、彼は、衣類やシーツの中で大量の汗をかき続けるよう未亡人から強いられているからである。ダグラス未亡人によるハック救済活動は、この状況を加味すれば、公衆浴場政策と同様、浮浪児を衛生施設に囲い、清潔指導を施すことが大きな目的であったと考えられる。スラム街の浮浪児が引き寄せる病気など、不可視の領域に脅威を覚えたボストン市民と同様、未亡人を始めとする共同体の母親たちも、見えないものに対して気をもむ。だからこそ、たとえば未亡人は、どれだけハックが抵抗しても、彼の身体を磨き上げ、清潔な服装に身を包むよう奮闘するのである。

したがって、セント・ピーターズバーグの母親たちに悪気はない。彼女たちは、ポリーおばさんがそうであるように、自分たちを“the suffering neighbors”（93）救済を任命された“an angel of healing and the balm of Gilead in disguise”と思い込んでいる。その使命を果たすべく、彼女たちは、買いあさった健康マニア向け雑誌からインチキ健康法を習得し、近隣住民救済にひた走る。その被救済者がトムであり、ハックなのである。トムと違い、母親の抱擁に縁遠かったハックは、一見慈愛に満ちた母の愛情表現に息が詰まってしまう。彼にとって抱き締められることは、父権的な法の処罰よりもずっと恐ろしいことなのである。

ここで、母親的愛情表現に対するハックの拒否反応を見るため、トムとジョー、ハックが自分たちの葬儀に現れる場面を再確認しよう。トムとジョーの母親たちは、戻ってきた息子たちを抱擁し、窒息するほど口づけし、神に感謝の祈りをささげる。一方、彼らを取り巻く熱烈な歓迎

ムードに完全に取残されたハックは、ひたすら居心地の悪さを感じる。ハックを迎え入れる母親がいないことに気付いたトムは、ポリーおばさんに“Aunt Polly, it ain’t fair. Somebody’s got to be glad to see Huck.” (131) と助言する。彼の言葉に共感した彼女は、トムが戻った喜びに興奮していることもあり、ハックに対する普段の嫌悪感を忘れ、彼を抱き締める。彼女の腕に包まれたハックは、冷たい視線を投げかけられた時以上に虫唾が走る。同様に、彼は、ダグラス未亡人に対しても、“The widder’s good to me, and friendly; but I can’t stand them ways.... It’s awful to be tied up so.... I never see such a woman!” (256-57) と、愛憎相半ばする感情を持つに至る。このように、子どもを抱きとめることが愛だと疑わない母の抱擁も、度が過ぎれば暴力となることを、ハックは作品内で告白している。彼は、トム・ソーヤーを始めとする子どもたちが帰巢し、育っていく「母親の世界」の“them ways” (256) に批判的な眼を向け、母親の腕の中には父親の暴力とは性格の異なる暴力があることを腹藏なく明らかにしているのである。

おわりに

本稿では、セント・ピーターズバーグの浮浪者対策が、治安判事による父権的で暴力的な浮浪罪と、ダグラス未亡人による母性的で慈愛に満ちた清潔指導の二種に代表されていることを明らかにした。そして浮浪児ハックの場合、彼女の自宅で清潔指導が始まるやいなや、愛すべき我が息子の外見を変えれば、内面まで良くなると信じ、実践する、清潔志向という名の暴力的側面に気付く。母親の腕の中に包まれてこなかった彼にとって、母親的存在から抱擁されることは、父権的権力の暴力性よりも歯がゆく、恐るべきものである。だからこそ、『ハックルベリー・フィンの冒険』に入ると、ダグラス邸から人里離れた小屋へ父親に拉致監禁された彼は、父から逃れられた後も、自発的に彼女の家へ戻ろうとはせず、逃亡奴隷ジムと旅を始める。浮浪児ハックは、治安判事から処罰を受ける対象でもなく、「母親の世界」からも一定の距離を置こうとするマージナルな子どもゆえに、時に共同体の習慣に批判的な眼を向ける存在となりえるのである。

注

- 1) フットも、アメリカ版浮浪罪が“*future criminality*” (625) や“*a crime breeder*” (625) という悪の芽を強制的に摘む働きをした史実を認めている。
- 2) 水治療以外にも、アメリカ社会では、ドイツの細菌学者Robert Koch (1843-1910) がコレラ菌を発見した1884年まで、不潔物から立ち上る瘴気によって発病する*miasma*説が信奉されていた。同年、トウェインは、世界的な細菌学者B. B. Kshp (ハックのモデルとなった実在の人物Tom Blankenshipの姓の略) が魔術師の実験失敗によって“*Asiantic Cholera*”ハックに変身する*Three Thousand Years Among the Microbes* (1905) の着想を得た。ここでもトウェインが浮浪者を細菌に見立てている点は特筆に価する。

- 3) Joel Shew (1816-1855) は、オーストリアへ渡ってプリーズニッツ法を学び、ニューヨーク市初の水治療施設を設立した内科医である。1845年12月、彼が創刊した*The Water-Cure Journal* や*Herald of Reforms*はたちまち人気を博し、1850年には定期購読者が五万人に上った (Eng 96)。
- 4) 清潔の美德を健康に結び付け、それらの普及活動に努めた代表的人物の中には、Catherine Beecher Stowe (1800-78、名著*Uncle Tom's Cabin* [1851] の筆者Harriet Elizabeth Beecher Stowe [1811-96] の姉) もいる。汚れを労働の証と肯定的に捉える農民に対して、汚れと病気、清潔と衛生の関連性を説くビーチャーの闘いについてはHoy 19-23 に詳しい。
- 5) アメリカ全土に拡大した公衆浴場政策については、歴史家Marilyn T. Williamsの著書*Washing "the Great Unwashed"*の第一章と第二章に詳しい。
- 6) “HORSEWHIPPED!”の頭文字“H”のフォントが通常よりも大きい理由は、カリフォルニア大学出版社版のテキストに合わせたことにある。このフォントの大きさは、非人道的といえる処罰を受けた思い出が走馬灯のように去来した時にこみ上げてきたインジャンの憤りを視覚化する手法だと考えられる。
- 7) インジャンの場合、別の判事によって幽閉された洞窟の“prisoner” (239) となり、なす術も無く餓死する。本事件も、結果的には、浮浪罪の適用例と言えよう。
- 8) トムの発言の中で“T” (僕)、そして“H”と“F” (ハックの姓名の頭文字) のフォントが通常より大きい点も、注6と同様、カリフォルニア大学出版社版のテキストに合わせたものである。この強調箇所は、教師の激怒を買うために、あえてトムが音量を上げたことをテキスト上で可視化するための手法だと考えられる。
- 9) シミ一つないシャツは、紛れもなく未亡人の清潔意識の高さを明示している。一方、ポリーおばさんが毎日曜日のみトムによそ行きの服を着ることを許す“other clother” (29) は、普段着よりは格段にまともなものの、二年間使っている古着である。さらに、このよそ行きの服に合わせる“his [Tom's] speckled straw hat” (29) には、シミがついている。シミ汚れの有無という点で、ダグラス未亡人の目指す清潔さの度合いは、ポリーおばさんのものよりも高いことは言うまでもない。
- 10) サミュエル (トウェインの本名) の恋煩いを麻疹の症状と誤解した母親から水治療を受けた伝記的事実は、彼の少年時代を記した未完作品“Boy's Manuscript” (1868) の4-5を参照のこと。

引用文献

- Adler, Jefferey S. “Streetwalkers, Degraded Outcasts, and Good-For-Nothing Huzzies: Women and the Dangerous Class in Antebellum St. Louis.” *Journal of Social History* 25 (1992): 737-55.
- Alcott, William A. “On Cleanliness.” *The Moral Reformer and Teacher on the Human Constitution* 1 (1835): 14.
- Campbell, Neil. “The ‘Seductive Outside’ and the ‘Sacred Precincts’: Boundaries and Transgressions in

- The Adventures of Tom Sawyer.*” *Children’s Literature in Education* 25 (1994): 125-38.
- Chambliss, William J. “A Sociological Analysis of the Law of Vagrancy.” *Social Problems* 12 (1964): 67-77.
- Eng, Ruth Clifford. *Clean Living Movements: American Cycles of Health Reform*. Westport: Greenwood, 2001.
- Fiedler, Leslie A. *Love and Death in the American Novel*. 1960. New York: Stein and Day, 1966.
- Foote, Caleb. “Vagrancy-Type Law and Its Administration.” *University of Pennsylvania Law Review* 104 (1956): 603-50.
- Heneghan, Bridget T. *Whitewashing America: Material Culture and Race in the Antebellum Imagination*. Jackson: UP of Mississippi, 2003.
- Hoy, Suellen. *Chasing Dirt: The American Pursuit of Cleanliness*. New York: Oxford UP, 1995.
- Lacey, Forrest W. “Vagrancy and Other Crimes of Personal Condition.” *Harvard Law Review* 66 (1952-53): 1203-26.
- Shew, Joel. *Water-Cure for Ladies*. Rev. ed. New York: Wiley and Putnam, 1844.
- Twain, Mark. *Adventures of Huckleberry Finn*. 1885. Berkeley: U of California P, 2001.
- . *The Adventures of Tom Sawyer*. 1876. Berkeley: U of California P, 1982.
- . “Boy’s Manuscripts.” 1868. *Huck Finn and Tom Sawyer among the Indians: And Other Unfinished Stories*. Ed. Dahlia Armon, et al. Berkeley: U of California P, 1989. 1-19.
- . “Three Thousand Years among the Microbes.” 1905. Ed. John S. Tuckey. *The Devil’s Race-Track: Mark Twain’s “Great Dark” Writings*. Berkeley: U of California P, 1980. 161-281.
- Williams, Marilyn T. *Washing “The Great Unwashed”: Public Baths in Urban America, 1840-1920*. Columbus: Ohio State UP, 1991.

The Violence Called Cleanliness-Conscious Education:

Measures for Vagrants in Mark Twain's *The Adventures of Tom Sawyer*

Asako Motohka

The community of St. Petersburg is divided into two worlds: the tyrannical legal world and the benevolent and caring world of mothers. People's attitudes towards vagrants are also split in two. The judges, a typical example of the legal world, severely impose a penalty on Huck's pap and Injun Joe for vagrancy; on the other hand, widow Douglass, a representative of the world of mothers, adopts Huck and provides him with education in hygiene. In this regard, there is a complete antithesis between "the legal world of judges" and "the world of mothers." But, in *The Adventures of Tom Sawyer*, Huck happens to realize that there is another kind of violence in women's world. The widow's cleanliness-conscious correctional education is a good example. As soon as he moves to her house, the widow starts to drum cleanliness into his head. Huck, who has not got used to wearing clean tight-fitting clothes and washing his body, and so on, cannot keep up with her "respectable" way of living. Huck is not arrested as a vagrant like his father and Injun Joe, and moves to the widow's house in this story, because he has the role of disclosing the negative side of women's excessive concern with childbearing.